

大阪・関西万博に期待すること・実現したいこと

大阪府立大学研究推進機構教授  
大阪府立大学観光産業戦略研究所所長  
橋爪紳也

先日、親委員会で配布した資料「大阪・関西万博のテーマの具体化及び開催計画の基本的な方向性の検討に向けて」に追加して、以下、検討すべき事項について、若干の私見を追記しておきたい。

#### ■会場計画

- ・ 各パビリオンのガイドライン策定に向けて、素材や高さ規制、夜間景観の魅力創出など、考え方を整理しなければいけない
- ・ 台風や地震など災害時における備えも精査が必要。避難所の確保とともに、災害時の対応も、Society5.0の社会を具現化する先導的なモデルが必要。新しい技術での情報提供、新たな備蓄品の考え方なども検討課題定すべき
- ・ 遊戯施設や休憩施設など、家族連れや若年層に配慮した魅力ある施設も検討すべき。1970年大阪万博のエキスポランド、1990年花博のキルメスなどが先例。eスポーツのアリーナ、西側の緑地もしくは南側の水面を利活用したアミューズメント施設群などが想定される。もっとも必ずしもサイト内である必要はなく、愛・地球博ではサテライトと位置づけられた笹島に、別主体によってアミューズメントパークを展開していた
- ・ ストリートファニチュアやパブリックアートなど公共空間のデザインにあっても、博覧会のテーマに添いつつ、なおかつ共創の手法を取り入れることが求められる。たとえば100人が共創する休憩施設を10カ所つくれば、1000人が共創して創り上げた休憩施設となるといった発想が必要。
- ・ 博覧会にふさわしい建築や空間デザイン概念、素材などのガイドライン化。たとえばニューヨーク市が取り組んできた「アクティブデザイン」などが、ベンチマークとなる
- ・ ヘリコプターやドローンの利活用に関する条件整備、ヘリポートの整備検討
- ・ 人口的な微地形造成、雨水循環活用システムなど、ランドスケープ・インフラ概念の導入
- ・ グリーンワールドに関して、次世代の担い手となる若手のランドスケープ・アーキテクトの意見を聞くことが必要。実際の緑と、バーチャルな緑との融合をはかる工夫。緑化プロセスに関する新しいアイデアなど

#### ■地域経済の活性化に関して留意すべきこと

- ・ うめきた2期で展開される予定の「共創コミュニティ」、大阪商工会議所の次世代医療システム産業化フォーラムなどとの連携。

#### ■共創に向けた「100の共創プロジェクト(仮称)」

- ・ 2020年5月～2025年4月にかけて、たとえばオンライン・プロジェクト「100の共創プロジェクト(仮称)」を実施。成果をレガシーとする
- ・ 「Saving Lives」「Empowering Lives」「Connecting Lives」の主題を掲げ、各33件、合計99件を実施。最後の1プロジェクトを会場内で行う「100の共創プロジェクト館(仮称)」として展開

#### ■共創に向けた連携事業の展開

- ・ 博覧会開催に向けた機運を盛り上げるべく、共創型の連携事業を実施。
- ・ たとえば下記の事業なども想定されてよい
  - 大阪マラソンのチャリティプログラムとの連携（2020年から万博に向けたチャリティテーマを設定するなど）
  - 会場内外の記念植樹に関するクラウドファンディング（寄付による街路樹と緑地整備）
  - 関西の食文化を活かした新たな名物の創造
  - テーマ曲や行進曲の公募。1970年大阪万博では「万国博覧会行進曲」「世界の国からこんにちは」などが人気。
  - 動物や植物など人類以外の「いのち」に関する国際フォーラムの実施
  - 1990年鶴見花博の「いのちの塔」のデザインに寄せられた児童画の活用